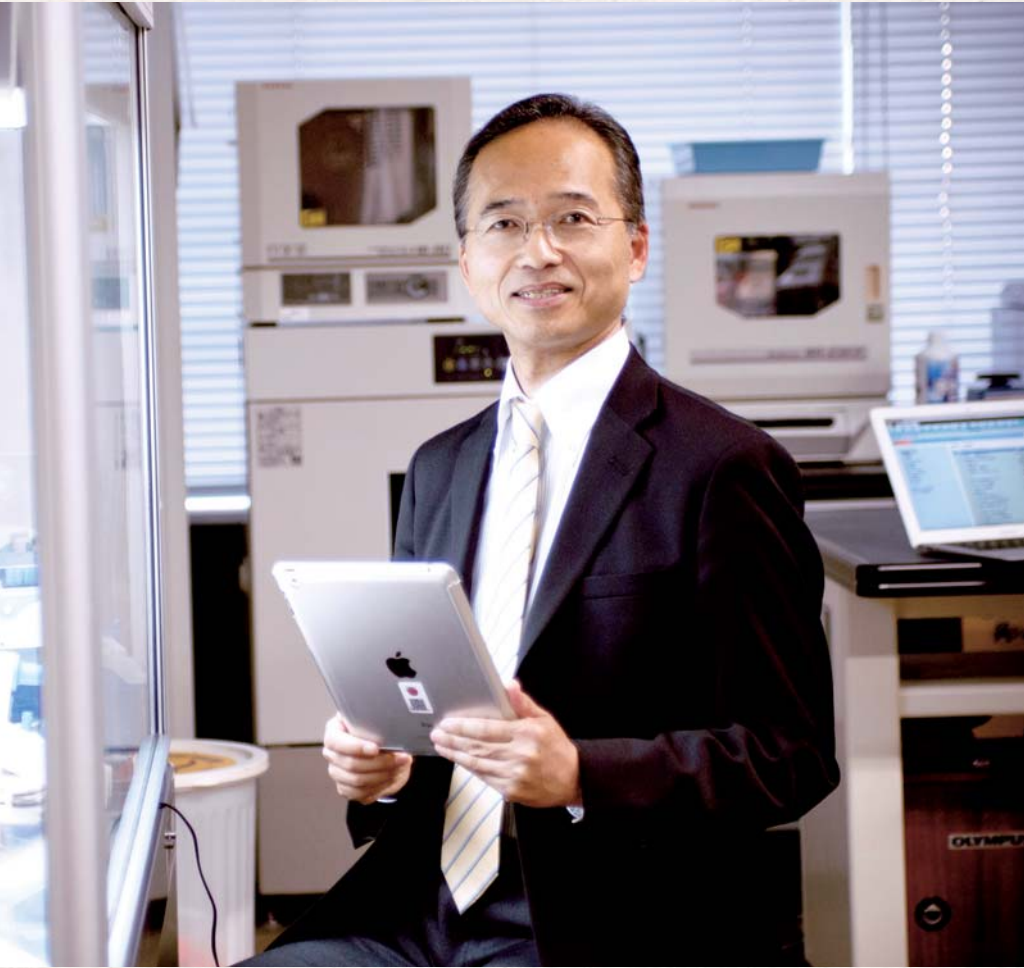


キャリア教育で学校を変える。教師が変わる。

教員の都合で、生徒の未来を ふさぐわけにはいかない



広尾学園中学・高校
教務開発部統括部長
(前広報部長)

金子 暁

かねこ・さとし ● 1958年生まれ。筑波大学人文学部卒業。81年、学校法人順心女子学園(現順心広尾学園)入職。広報部長などを経て、今年度より教務開発部統括部長。ICT教育・キャリア教育・広報担当教諭。

文／堀水潤 撮影／渡邊力 P 58、61

存続の危機から転、首都圏有数の受験者を集めるなど、二躍名を広めた中高一貫校がある。各国の大使館が連なる都心の二等地、港区にある広尾学園(旧順心女子)中学校・高等学校だ。奇跡的とも言われるV字回復は、前理事長・学園長の手腕によるところが大きいと評されるが、それを支えたのが新旧の教職員だ。

その一人が、広報部長として、学校が変革する様を外部に発信し続けてきた金子 暁である。私学の広報担当としては意外なほど、飾り気がなく物静かな語り口。それだけに本質が際立つが、氏が語る言葉に説得力が伴うのは、

そうしたスタイルのためだけではなく、独自の広報姿勢によるところが大きいようだ。
ある私学の挑戦を広報責任者の視点で追う。

板垣退助夫人絹子によって1917年に創設され、女子教育の長い歴史をもつ順心女子に金子が入職したのは81年のこと。どこことなく保守的な職員室の雰囲気嫌い、社会科の教員ながら体育教官室で過ごすことが多かった少し風変わりな若手教員は、顧問となったテニス部の指導に明け暮れた。目標にし、度々応援役を買っていた女子バレーボール部が春高(全国高等学校バレーボール選抜優勝大会)で優勝した89年の興奮は今も覚えている。

しかし、部活動の勢いや伝統的な情操教育だけで入学者が集まる時代は終わろうとしていた。当時1500人いた生徒数は90年代後半に激減し、01年には500人にまで落ち込んだ。その後下げ止まったとはいえ、定員の3分の1では私学経営は立ちいかない。そうした危機のもと金子は企画経営室のメン



バーに名を連ね、広報の仕事に携わるようになった。他校では塾や中学校に日参すること
で募集を回復させた例もあると聞く。金子
らもそれに倣い、塾回りに力を入れた。だが、
世間の同校に対する評価は想像以上に厳し
かった。

「訪問しても、『この忙しい時に』という態度
がありありで、気が引けていました」

そんななか金子は授業改善に取り組む。
生徒数が減るなか、せめて目の前の生徒には
いい授業をしたいという思いからだ。人間社
会学と名づけたテーマ学習では、バチスタ手術
で知られる心臓外科医 須磨久善氏のもとを
訪ねたり、在宅医療で患者を看取る医師を
招いたりするなど、死生観を問う授業を行っ
た。希望者を募り裁判の傍聴にも足を運ん
だ。当時はオウム裁判の渦中。生徒はもちろ
ん同行した教員にも強烈な印象を残した。

「学校教育では避けて通りが重なる部分
ですが、社会には知らなければいけないこと
がたくさんあります。歴史にしても現実と
切り離されては意味がありません。教科
書に書かれていない現実をぶつけたという
気持ちでした。中高時代は感性の黄金期。こ
の時期に感じたことは生心に残ります。いつ
か点と点とがつながるような、そうした体験
の機会を多く提供していきたいのです」

これは、今の広尾学園のキャリア教育の通
底に流れているスタンスだ。

共学化、進学校化の道

危機感こそあれ、まともきりなかつた順
心が劇的に変化したのは、05年に大橋清貴
前理事長が就任してからだ。メインバンクから
取引停止の宣告をうけるような状況にあっ
て、塾経営で実績を残し、かつ教育への情熱が
深い氏に、学校の立て直しが期待された形だ。
前理事長の方針は、2年後の07年に共学化
し、進学校として再出発を図るというもの。
その前段階として、特進コースの設置、PLET
(毎朝の小テストを学習司令センターが分析
し再テストを繰り返す個別学習)、土曜特別
講座(希望者対象の課外講座)の精選といっ
た取り組みが次々と実施されていった。

特筆すべきは入試研修や模擬授業などの
教員研修を導入したことだろう。全教員に難
関大学の入試問題を解くことを義務づけ、規
定の点数に至らない教員は一定のレベルになる
まで再研修を課した。模擬授業は同僚同士
さらには専門の外部トレーナーによつて評価
され、授業力の向上に結びつけた。

民間的なトップダウンの改革にも思える
が、必ずしもそうではなかつたと金子は言う。
パブリックヒアリングと称し、多くの教職員や
関係者から意見が吸い上げられたほか、新入
生の保護者との面接も恒例となった。

「PLETなどは塾のノウハウを持ちこんだもの

でしたが、教員研修については私たち教員の
提案で実現したと認識しています。のんびり
した校風の学校が急に進学実績を上げます
と言ったところで誰も信用してくれません。
何をもちて信頼してもらうかといえば、授業
力の向上しかないと考えていたからです」
これまで同校の進路指導といえば指定校
推薦枠をいかにうまく配分するかというも
の。一般入試の指導力については疑問符がつく。
「進学校になると宣言しているのに、教える
側が難関大学の試験を解けないようでは話
にならないわけで、教員の抵抗はそれほど感
じられませんでした」

と金子は言う。反対意見や慎重論が多かつ
たのは、男女共学化に対してだ。

「教職員のなかには『時期尚早』『これまでの
良さを継続しよう』という声があがっていま
した。しかし、変わらざるを得ない環境におい
て、もはや猶予はありません。これまでの女
子校としての枠組みを突破できず、もがいて
いたところに新しい理事長がきて『変えても
いいのだ』と言ってくれたことで、教職員の意
識がぐっとまとまりました」

広報部長として、世間のシビアナ目にとさら
され続け、危機感を人一倍感じていた金子は、
その流れを歓迎した。

発信する広報から、作る広報へ

変わると決めると、俄然重要になるのが広
報の役割だ。06年夏には、翌年の新入生、すな
わち広尾学園の1期生募集のため、塾や教育
業界に向けた学校説明会を実施した。会場

は、学校から徒歩圏内の六本木ヒルズ。これま
で校内で実施してきた学校説明会の参加者
は集まっても数十人だ。にもかかわらず思い
切つて300人分の席を用意した。

「話題の六本木ヒルズで学校説明会を行えば
インパクトがあるし、本気度も伝わります。
学校の立地をアピールするにも絶好の場所デ
す。不安でしたが、もはやあとには引けませ
ん。開き直つて前へ向かっている感じでした」

前理事長の著書には、「いつも冷静沈着な
広報部長が、興奮に顔を上気させながら話し
ていたのが印象的」という記述がある。1年間
かけて準備した大規模な学校説明会は、当
日、立ち見がでるほどの盛況であつた。

「辛酸をなめてきたうちが、あれだけ大きな
会場に人を集め、ミスなくやり遂げたことで
自信ができました。俺たちにもできる、やれ
るという手応えを強く感じました」

実は、新体制になつた際、金子は「広報の仕
事に専念するか、授業に集中するか」という
選択を迫られていた。学校の方針として、教
員に授業力の向上を求めるいっぽう、校務分
掌などで過度な負担がかからないような配
慮がなされ、役割分担が奨励されていたの
だ。金子は熟慮の末、広報の仕事を選んだ。

「それまで広報担当としていろいろなことを
吸収し、外との関係を築いてきたこともあつ
て、自分にとって本当にやりがいのある仕事は
どちらか考えた上での結論でした。以前から
授業改善などに取り組んできましたが、それ
らは自分のクラスや学年のなかで完結してい
ました。けれど、広報の立場から『今、こうい
うことが求められている。こういうことをし



(上)バリ島でのICT研修会「Apple Distinguished Educators Asia-Pacific Institute2013」にて。(下)ICT機器を活用した授業風景。

よう』と校内にアナウンスすれば、学校全体を動かすことも可能になるわけです。授業時数が減ることに対して教員としての葛藤や不安もありましたが、成果をだすにはこれしかないという思いでした」

現場が作ったカリキュラムやプログラムを発信するのが一般的な広報の役割だとしたら、金子の考える広報は少し違う。広報する材料がなければ自ら作るというスタンスなのだ。そのため、自分たちの発案で実施した教員研修にしても、その様子を撮影しては学校のホームページに次々とアップしていった。「既存のものを伝えるという受け身の姿勢ではうまくいかなかったでしょう。学校教育自体を作るつもりで広報に携わっていました」

英語教育とサイエンス教育

こうした学校改革によって中高ともに受験者数は急増した。07年の中学入試では、

毎年40人前後であった入学者が160人に翌08年には220人に増えた。09年の入試では都内の中学校で最も多くの受験者を集めた学校として話題を呼んだ。全校生徒数は09年に1000人、10年には1500人を超えた。

生徒の大幅な増加と偏差値の急上昇に伴い、現有戦力に加え多くの教職員が新たに採用された。学校が目指した知識習得型から思考型・対話型・アウトプット型の授業への転換を含め、授業力は向上していった。

なかでも広尾学園が力を入れたのが英語教育と理数系教育だ。

07年には、ほぼすべての授業が外国人教員によって英語で行われるインターナショナルクラスを学年に1クラスずつ設置した。その中のアドバンスグループが帰国子女中心であるのに対して、英語力はないが意欲ある生徒のために、スタンダードグループを10年に設置。人気コースとなった。

「インターナショナルクラスからはUCLAやトロント大学など海外一流大学への進学者が誕生しています。その結果をみて、恥ずかしながら、東大や一橋といった大学しか頭になかった自身の価値観も変わりました」

語学とともに力を入れているのがサイエンス教育だ。9階建ての新校舎の完成により、DNA操作やiPS細胞の培養も可能な、大学の研究室並みのサイエンスラボをもつ同校だが、校舎建て替え時期の理科室は「ガスバーナー1本しかないような貧弱な環境」であったという。そうしたなか、「生徒に本物の研究をさせたい」という若手教員の熱意に込められ、次々と高価な実験機器が導入され、11年には理数系の難関大学を目指す「医進・サイエンスコース」が高校に設置された。

生徒の研究活動は大学の研究室と同じレベルで進められる。テーマ設定で重要なのは新規性だ。そのため、英文の学術論文をリサーチし、その分野の研究がどこまで進行しているかを知るところから研究はスタートする。それだけに、次のようなエピソードも起こる。

「再生能力の高いプラナリアを使って寿命の研究を行っていた女子生徒がいました。ところが、同時期に外国のグループが同じ仮説で進めた研究成果を発表してしまったのです。彼女は号泣し、悔しさをあらわにしています。一流の研究者と対等な立場という感覚でいるのです。その場にいた私は、本物にこだわった本校のサイエンス教育のすこみを実感しました。彼女らが大学に進学したとき、ほかの学生とは意識がまったく違うはずですよ」

種を蒔くキャリア教育

09年、それまで広報業務に没頭してきた金子は、キャリア教育の担当責任者を兼務する。

「考えてみれば女子用のキャリア教育プログラムはあっても、共学用のそれはありませんでした。そうした不備を校内で訴えているうち自分が担当になってしまったのです」

そして、若い教員と練り上げた初年度の年間計画が、ロボット講座(5月)、特別講演会(6月・11月)、難関大学キャンパスツアー(7月)、宇宙天文合宿(8月)、つくばサイエンスツアー(9月)、DNA鑑定講座(9月)、大学学部研究講座(9月)、司法裁判講座(2月)、スーパーサイエンスデー(20人以上の研究者による講座)(3月)というものだ。この大枠は今もあまり変わっていない。

6月の特別講演会で招いたのは心臓外科医の須磨医師。「最初に呼ぶ大物は彼しかない」という金子の強い思いで実現させたものだ。著名人であっても、熱意を伝え、下調べをし、真剣に頼めば、無名の学校でも力になってくれることは、順心時代に実感している。

講師にお願いしているのは、「子ども向けの内容にはしてほしくない」というもの。

「たとえ理解できなくても、生徒は理解しようとして背伸びをします。そこが大切です」

実際、高度な内容にもかかわらず、DNA鑑定講座やロボット講座といったサイエンス講座には毎回100人以上の参加がある。かつて、須磨医師のもとを訪ねた際に同行した女子生徒は5人。裁判傍聴も多くて10人であつ

た。それが今、数十倍の規模で行えるようになったことに、金子は手応えを感じている。

実はこれらのプログラムの多くは「単発のイベント」だ。特に事前・事後学習はしていない。うえ、「1年次には〇〇力を、2年次には〇〇力をつける」といった理論づけもしていない。そもそも実施するのは土曜日や学期末などの課外の時間であり、キャンパスツアーを含め、学年の枠を超えて自由に参加できる。

事前・事後学習によって体験に深みをもたせたり、力を定着させたりするのが一般的であるが、金子は敢えてそこにこだわらない。

「事前・事後学習をする余裕がないというのもありですが、形にこだわらぬより本物にぶつけたほうが早いこともあります。むしろ事前に下手法の説明をして学習っぽくした興味は薄れてしまうかもしれません。『中1はこうで、高2はこうした内容で』といった発達段階を意識したプログラムというの個人的には懐疑的です。そんなに都合よく人が成長するはずはありませんし、エンジンがかかるタイミングは人それぞれ。そのとき何も感じなくても、数年後に『あつ』と気づくこともあるでしょう。ですから、私たちのプログラムでは、どれだけ多くの生徒に、いかに多くの種を蒔けるかをメインに考えています。絶対に避けなければいけないのは、枠を決め、それに生徒を当てはめ、『こんな効果がでた』と教員が自己満足するプログラムです」

学校教育とICTの親和性

今、金子は、iPadを積極的に活用する

などICT教育の先駆的存在として注目されている。もともとICTに詳しかったわけではない。広報業務の一貫で授業の動画を編集しホームページにアップしたり、予算が限られるなか、海外のフリーサービスを見つけて活用したりするなど、必要に迫られながらスキルを高めてきた。

そんななか、発売直後のiPadを店頭で手にしたとき「これこそ教育のためのツール」と直感したのだという。

「教室用に作られた端末とは思えませんでした。一人ひとりの机の上に教科書やノートとともにある映像が頭に浮かびました」

各科目における生徒の能力や進度は異なる。それを個人的に補うツールとして最適だし、パソコンよりも機動性が高い。これこそ「方通行の教育を変える新しい学習スタイル。生徒が初めて手にした、能動的な学びのためのツールであり、武器だと金子は表現する。」

そして11年に今度はICT教育の責任者を兼務するようになる。まず医進・サイエンスコースの生徒全員にiPadを貸与。12年には中学の新生徒全員に自費でのiPad購入をお願いし、授業や学校生活、課外活動で活用している。ただし、導入したからといって、アナログで済むところを無理やり使わせるようなことはしていない。あくまで必要に応じて自由に使う補助ツールとしての扱いだ。そのため、多用している生徒もいれば、そうではない生徒もいる。

とはいえ、「デジタルネイティブ」という言葉もあるように、今の子どもたちにとっては、デジタル機器があるのが当たり前。黙っていて

も、自分たちなりに使いこなしていく。

導入にあたり保護者からクレームが来たことはない。むしろ、こうした場合「有害サイトの対応は？」「壊れたり、盗難があったらどうする？」「時期尚早だ」といった慎重論がでて、もたもたするのはいつも教員の側だ。

「今の生徒はこれがあるのが当たり前。デジタルネイティブを入学させておいて、デジタル難民ともいえる古い世代の価値観を押しつけてどうするのでしょうか。教員の不安や都合が大事にされ、生徒を押さえつけた結果生じる損失のツケは誰が払うのでしょうか。結局、反対する人は、どんな場面でも反対するんです。そうした意見におされ、生徒の未来を二の次に考えてはいけません」

そのようなことを発信しているうち、同じような考えをもつ全国の教員や教育関係者とつながりができた。ここ半年だけでも、「Apple Distinguished Educators Asia-Pacific Institute 2013」「教育ITソリューションEXPO」をはじめ多数の会議に参加する機会をもった。いずれの会場も、新たな教育の可能性に期待する熱気で包まれていた。

先進的なICT教育は、結果として自校の広報材料にもなるが、生徒募集の話題作りにするつもりはない。広報部長就任以降、自校のことで頭がいっぱいであつたが、今は、現場の実践を発信することで日本の教育環境が少しでも良くなれば、という思いが強い。これもまた金子なりの広報の仕事のあり方だ。

改革を牽引した前理事長が任期満了により学園を去り、今年度から新しい体制となつ

た。金子は新設された教務開発部の統括部長となり、広報や教員研修のほか、キャリア教育やICT教育を引き続き推進する。

都内有数の人気校となり、偏差値が上昇し、能力やモチベーションの高い生徒が増え、大学進学実績も向上した。しかし教職員自身が納得できる数字には至らず、満足はしていない。それでも金子は、頑張ることをとする空気が校内に醸成されていることをよるこぶ。

「勉強を揶揄するような、できないことを見下すような空気がありません。頑張ること、前向きなことはいいことだという雰囲気になっています。本当に素晴らしいです」

そう話す金子の口調はやはり穏やかで、淡々としているだけに、心に響く。(敬称略)



チアリーディング部ほか部活動も盛ん。共学化後も女子が元氣だ。